



TOKYO ROPPONGI ROTARY CLUB



Weekly Report

「つなげようロータリーの^わ！」（=和・輪）

東京六本木ロータリークラブ会長

令和3年9月13日発行 第682号

2021・2022年度 No.9

本日のプログラム

令和3年9月13日

卓話『「わんぱく相撲」の魅力～負けの経験が心を育てる～』

公益社団法人東京青年会議所 顧問 / (株)三善堂 常務取締役 諸田 徳太郎様

場所 グランドハイアット東京

ご略歴

2011年 公益社団法人東京青年会議所 入会

2015年 わんぱく相撲委員会委員長

2018年 副理事長 2020年副理事長 2021年顧問

クラブからのお知らせ

令和3年9月6日

会長代行(副会長)挨拶

先日ご案内したとおり、マウラー・ピー・リードさんが、8月30日に永眠されました。

マウラー・ピー・リードさんは、2005年1月17日に当クラブに入会されました。

推薦人は佐藤晃一さんです。

マウラーさんは、8年もの間、皆勤出席されており、当クラブの例会を非常に楽しんでいらっしゃいました。

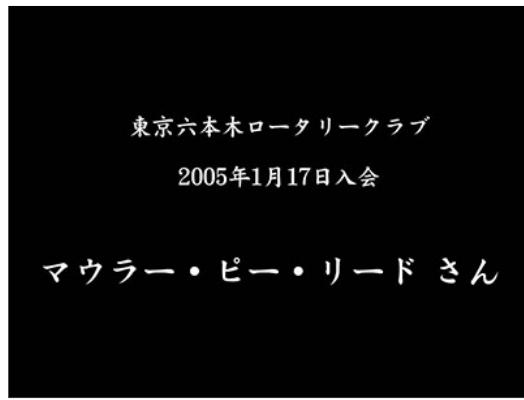
マウラーさんは歌が大変お好きで、当クラブでもソングリーダーを長く務めていただきました。

また、六本木クリーンアップ活動にもご参加頂くなど、奉仕委員会の活動にも積極的にご参加いただきました。

マウラーさんとの想い出を映像にまとめて頂きましたので、ご覧ください。

マウラーさんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

フェルドマン様、本日の卓話、よろしくお願ひいたします。



※画像をクリックするとPDFが開きます。

以上

(記:今村副会長・高倉幹事)

幹事報告

2021-22年度幹事の高倉です。

幹事報告は3点です。

1. ガバナー月信の件

8月31日に、事務局から皆様宛てに、メールで「ガバナー月信9月号」をお送り致しましたので、ご覧ください。

2. 佐賀・長崎豪雨災害支援金のお願い

お盆から全国的に発生した大雨により、特に佐賀・長崎地域において多くの被害が発生しました。

国際ロータリー2740地区で「佐賀・長崎地区豪雨災害支援本部」が設置されたとのことで、当クラブ所属の2750地区でも支援を行うことになりました。

つきましては、1口500円以上で募金をお願いしたいと存じます。

今週と来週の2日、募金箱をお回ししますので、よろしくご協力のほど、お願ひいたします。

3. 第3回定例理事会の件

来週9月13日11時30分より定例理事会を開催しますので、理事及び理事会構成メンバーの方はよろしくお願ひします。

以上

(記:高倉幹事)

各委員会報告

ロータリー情報委員会報告

ロータリーの友9月号のご紹介です。4ページにはシェカール・メータRI会長のメッセージ、また9月は基本的教育と識字率向上月間ということで、リテラシー向上についての特集です。リテラシーとは、もともとは文字を正確に読んだり書いたりする能力を表わしていましたが、今ではもっと幅が広がり、先日のオリンピック開会式でも話題となったピクトグラムやヘルプマーク、各分野の専門的な単語を正確に理解する力も含むようになっています。23ページからは、新しいロータリー財団資金モデルの手引きについての特集記事です。グローバル補助金の総額は直近6年間で2倍以上に増えていますが、需要には追い付いておらず、グローバル補助金を受ける資格のあるプロジェクト全てに補助金が下りているわけではないのが現状です。より多くの持続可能な大規模プロジェクトを支援するため、今年7月より財団の資金モデルの変更がなされましたので、是非お目通しいただきたいと思います。

34ページからは今年度より連載となっている写真撮影のコツです。今月は例会での室内撮影がテーマとなっていますので、広報委員の皆さまも参考になさってください。45ページにはロータリー財団管理委員長からのメッセージ、困難にも負けず教育支援プロジェクトを行うマララ基金を立ち上げたマララ・ユスフザイさんとの情熱と夢を現実に変える力か

らロータリアンが学ぶべきこと、そしてロータリーの補助金を活用した持続可能なプロジェクトの重要性を発信しています。

縦組みの記事から、他クラブの活動をご紹介します。52ページ京都洛東ロータリークラブの取り組みです。SDGsを念頭に、コロナ禍でもクラブとして取り組める事柄として、食品ロスやペーパーロスの軽減を図るため、例会や委員会など全ての出欠をウェブ上で登録できるシステムにしたそうです。これにより事務局の負担軽減だけでなく、事前に人数を正確に把握できることからソーシャルディスタンスの確保にも繋がっているとのことでした。また、クラブのウェブサイトも充実させ、マイロータリーの登録も100%になったとのことです。

ロータリーの友9月号、お時間のある時に是非ご一読ください。

(記:鈴木ロータリー情報委員長)

卓話『現代アートの新潮流—古いことが新しい』

令和3年8月2日

森美術館館長・国際美術館会議(CIMAM)会長 片岡 真実様

世界で旅行ができなくなった今、東京オリンピックの開催で、「世界が日本にやってきていく」という感じがします。スポーツの場合はタイムや数字で勝敗が明らかになり、日本が世界のどのポジションにいるのかということが分かりやすいですが、芸術はヒエラルキーで順番に並んでいるものではなく、様々な価値観が同時にいかに存在できるのかを眺めるようなものだと思っています。

現代アートは、学校で習ったアートの歴史の一番先端にあるのですが、「現代」の定義には諸説あります。第二次世界大戦中にヨーロッパから多くの芸術家がニューヨークに亡命したことをきっかけに、戦後の最も先端をいくアートの中心がパリからニューヨークに移った1945年以降を現代アートと定義付けているのが最も一般的かと思います。アートの定義が色々な方向に拡大をしていった60年代以降の作品を現代美術として集めている美術館もあります。さらに、冷戦が終結し多文化主義の時代に入った1989年以降のアートを現代と捉えている場合もあります。またそれぞれの時代の最も新しいものが現代アートで、印象派も生まれた時には現代アートであったという考え方もありますので、複数の定義がさらに難しくさせています。



現代アートの父といわれているマルセル・デュシャンは、20世紀初頭に男性用便器を横に倒したものを《泉》というタイトルで出品しています。既製品を展覧会へ出品し、さらに架空の人物の署名だったことが大変革命的で、この《泉》を現代アートの起点と考える場合が多いです。マルセル・デュシャンの最初のレディメイド作品は1913年に作られており、100年以上前に現代アートの考え方の大きな革命が起こっていたことがわかります。

60年代には、見た目よりも作品の意味が重要だという大きな転換がありました。ジョセフ・コスースの作品である、《1つおよび3つの椅子》という作品は、本物の椅子、イメージとしての椅子、意味としての椅子がセットで作品となつておらず、概念を重視する「コンセプチュアル・アート」の象徴的な作品として知られています。

来年、国際芸術祭あいち2022が開催されます。「STILL ALIVE」というタイトルは、現代アート界の大スターである日本人の河原温が、「I AM STILL ALIVE (いまだ生きている)」というシリーズで、電報を1970年から30年ほど送り続けたものに着想を得ています。作品としては1枚の電報ですが、自分の生存を世界中の知人に送り続けたことがひとつ意味を成し、歴史化され、オークションでは400万円の値がつく作品となりました。

同じころ、アンディ・ウォーホルというポップアートの旗手も出てきました。大量生産大量消費の時代への応答として、一点ものではなく、シルクスクリーンという版画技法を使って複数のイメージを制作したことで注目されました。

ヨーゼフ・ボイスはドイツ人の芸術家で、作品の見た目の問題ではなく、概念でもなく、社会に芸術家がいかにコミットできるのかを問いかけた人で、「誰でもが芸術家になれる」という言葉や、現実社会に関与することを「社会彫刻」と呼ぶなど芸術概念をさらに拡張したことで知られています。ドイツからJFK空港に飛び、毛布に包まつたままマンハッタンのギャラリーへ直行し、1週間ほど野生のコヨーテと一緒に過ごして、またJFK空港に帰るという、歴史に残るパフォーマンス作品があります。コヨーテは先住民の中では神聖な動物と言われており、人間中心の文明社会に対しての批判的な行為を作品としたものです。1982年にはドクメンタという国際展で7000本の桺の木を植えるという社会活動を行いました。社会に対するコミットという意味で彼の残した功績は大変重要です。

80年代までは、ニューヨークなど欧米の本当に限られたエリアで行われていることが世界の現代アートをけん引するという構図がありました。1990年代以降、多文化主義、グローバル化が広がったことで、日本を含め、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど様々な地域の現代アートに等しく光が当てられるべきであるという考え方へ移行し、同時に世界各地で創設されたビエンナーレなどの国際展に多様な地域からの作品が集まるようになりました。80年代までの日

本では、欧米と日本を追っていれば国際的なキュレーターと言われていたと思いますが、これほどまでに現代アートが拡大した現代では、今や世界トップクラスのキュレーターだったとしても、誰もその全貌を知ることが出来なくなってしまいました。こう考えますと、日本だけでもなく、全世界でもなく、日本を含むアジア太平洋地域のアートの歴史や動向については理解を深めておきたいと考えています。ウクライナのピンチュクアートセンターが行っている世界最大規模の現代アートの公募展には4000人以上が応募をします。そこで最終選考に残った人がベネチア・ビエンナーレと同時開催の展覧会に出品されます。世界から認められるのは、本当に難しい時代になったと思います。

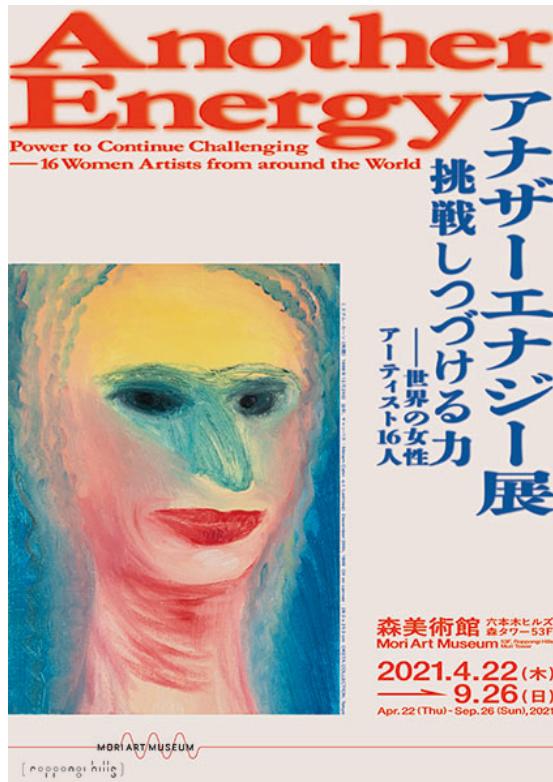
2019年のベネチア・ビエンナーレでは、気候変動や環境問題などをテーマに、仮設の砂場で人々がオペラを歌っているという長期間に渡るパフォーマンス作品で、リトアニア館が金賞を受賞しました。現代アートはもはや絵画や彫刻を超えて、政治や社会、経済、文化といった大変多様な要素を踏まえた総合的な領域になっています。わたしは現代アートは「世界の縮図」のようなものだといつも申し上げておりまして、どのように世界が成り立ち、どのようなことが起こっているのかを学ぶ機会になっていると思います。

次に現代美術を取り巻く環境という観点からお話をさせていただきます。80年代までは、アーティストが制作した作品は、自分たちで運営をする場所やコマーシャルギャラリー、ビエンナーレやトリエンナーレなどの国際展で見せる、あるいは美術館で作品を見るといったようにエコロジーで作品が流れています。それが90年代になると一部コマーシャルギャラリーもグローバル企業化し、また一度に色々なギャラリーの作品を見ることができるアートフェアというシステムも広がりました。一方でビエンナーレやトリエンナーレも世界中に創設され、現在では300以上あると言われていますので、人気のあるアーティストは引っ張りだこになるなど、難しい時代になっています。美術館についても90年代以降、「現代」と名の付く美術館も含め非欧米圏にも数多く創設されています。

コレクターの方たちはギャラリーやアートフェアで作品を買い、また今ではオークションにも容易に参加できるようになりましたため、そこで作品を購入することも盛んになっています。特に新自由主義が浸透して以降は、マーケットの価格も高騰し、美術館といえどもなかなか作品が買えない、個人の富裕層コレクターに作品が流れていくという時代になっています。

全体で現代美術を取り巻く世界を俯瞰しますと、ビエンナーレや美術館の活動など、非営利が原則となっている活動と、アートフェアやオークションなど作品の売買、市場に関わる営利活動の領域が緩やかに発展してきています。両方の領域で活躍しているアーティストもいれば、どちらか一方でしか活躍していないアーティストがいたりと、微妙に異なる世界が生まれているという現状です。

現在、森美術館では、「アナザーエナジー展：挑戦し続ける力—世界の女性アーティスト16人」を開催しています。ダイバーシティを重視する動きがグローバルに拡大するなかで、欧米、白人、男性以外のアーティストを美術史に加えていかなければならないという認識が広がっています。欧米の一部地域における美術を中心に歴史化されてきたなか、世界各地で並行的に発展してきたモダニズムからも美術の発展を読み取っていくこと、LGBTQなど多様なジェンダーや性的指向のアーティスト、有色人種や先住民の作品も評価していくことなどが喫緊の課題になっており、国際美術館会議などでも毎年のように総会のトピックとして取り上げています。こうした、いわば美術史上、見えていなかったアーティストの作品の可視化が進んでいるわけです。戦後の日本美術の再評価も進んでおり、50年代から70年代、関西を中心に活動していた具体美術協会メンバーの白髪一雄や田中敦子などや、60年代後半から東京を中心に注目された彫刻の動向「もの派」のアーティスト、李禹煥さんや菅木志雄さんなどはいずれも国際的な評価が劇的に高まっています。草間彌生さんはいまや日本の代表選手。女性であって日本人であるということがポジティブな条件として働き、2012年にテート・モダンが中心になって企画をした回顧展がヨーロッパを巡回。国内やアジア、オーストラリア、南米でも大型の個展が巡回し、どこに行っても美術館の入場者数の記録を更新しています。



そんな中での「アナザーエナジー展」ですが、60年代にアートの様相が大きく拡がり、その時期に活躍し始めた72歳から106歳の現役女性アーティストの展覧会です。途中はなかなか認められなかつた世代のアーティストですが、諦めることなくひたすら自分の道を築き、いまだに現役です。女性だけの展覧会はこれまでにもありましたが、72歳から106歳までという年齢にも注目したのはおそらく世界でも初めてで、大変話題になっています。

フィリダ・バーロウ 1944年イギリス生まれ、5人の子どもを育て上げて美術大学で教授職を引退したあとに大きなギャラリーがつき、2017年にベネチア・ビエンナーレの英国代表となり、今も大きな回顧展が後を絶たないアーティストです。今回は来日できませんでしたので、Zoomを利用して巨大なインスタレーションを作り上げました。自分たちの中にある、「70代女性の作品ってこんなもんだろう」という固定観念に気付いていただけるようなダイナミックな作品です。



フィリダ・バーロウ | Phyllida Barlow
《アンダーカバー2》
2020年

カルメン・ヘレラ 最高齢の106歳です。建築を学び、ハバナからニューヨーク、そしてヨーロッパでも暮らし、現在はニューヨークを拠点にしています。幾何学的な抽象絵画で知られ、1959年の作品は評価額約3億円。歴史的価値もある大変貴重な作品になっています。



カルメン・ヘレラ | Carmen Herrera

Courtesy:Lisson Gallery

三島喜美代 大阪出身で、岐阜県土岐市にもスタジオを持っています。具体美術協会とも親交がありましたが、仲間にはならず、独学で作品制作をしてきました。70年代に「情報の時代」と言われ、毎日来ては流れてゴミになっていく情報をどういう素材で表現したらいいかと考え、焼き物の割れる儘さと情報の儘さを重ね合わせ、陶で新聞を作りました。これまでなかなか現代アートの文脈で紹介されて来ませんでしたが、今まさに注目されているアーティストです。



三島喜美代 | Mishima Kimiyo



三島喜美代 | Mishima Kimiyo

《作品21-A》

2021年

出展作家であるスザンヌ・レイシーの、「物理的な身体という意味では確かに変化がありますが、内面にある魂は変わらないのです。It's still me.」という言葉が一番印象に残っています。「アナザーエナジー展」を見ると、年齢や性別といったアイデンティティから確実に解放されていて、自分のsoulそのままに表現を続けている人たちを実感できるかなと思います。どういうエネルギーが動力になってきたのかを探ってみると、自分の中の好奇心や完成度との戦いだったのかなと思います。ジェンダーや年齢に関わらず、あらゆる人たちにチャンスがあり、そして全ての人たちの中心にあるsoulとアートをどのように見ていくのか問われる時代になっていると感じています。



スザンヌ・レイシー | Suzanne Lacy

《玄関と通りのあいだ》

2013／2021年

本作はクリエイティブ・タイム（ニューヨーク）、ブルックリン美術館エリザベス・A・サックラー・センター・フォー・フェミニスト・アートの協賛によって2013年に制作されました。

アナザーエナジー展、機会がありましたら是非ご覧いただきたいと思っております。

ありがとうございました。

上記写真5点共通：

画像提供：森美術館

展示風景「アナザーエナジー展：挑戦しつづける力—世界の女性アーティスト16人」森美術館（東京）

撮影：古川裕也

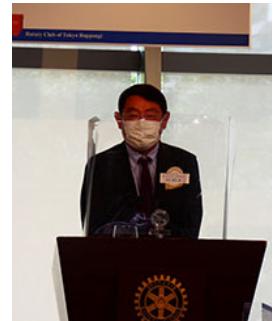
卓話『ビジネスに役立てたい 知るべきワインの知識』

令和3年8月23日

ザ・コンコルド・ワインクラブ 主宰 株式会社グランクリュ・ワインカンパニー代表取締役社長 渋谷 康弘様

私は長年インター・コンチネンタル・ホテルズでソムリエという仕事をしており、高級ホテルから日々ワインを飲まれる方々まで、隅々にワインを供給できればと思い、今の会社を立ち上げました。皆様にワインの熱い想いを聞いていただきたいと思い、本日は「ビジネスに役立てたい、知るべきワインの知識」というテーマでお話をさせていただきます。

1920年、治安が悪くなることや家庭内暴力等の理由によりアメリカで禁酒法が制定され、ワインを含むアルコール類の製造と販売が禁止されました。女性の社会進出がアルコールによって妨げられているとしてウーマンリブという言葉が生まれ、またジャズ・エイジという言葉が生まれ、禁酒法時代に一番アメリカが華やかになりました。アメリカの一流のバーテンダーが皆パリに逃げ、パリでカクテル文化が花開き、ジャズ文化も生まれました。禁酒法が20世紀初頭に世の中を大きく変えたと言われています。



高騰するワイン市場 禁酒法から約100年、ロマネ・コンティは世界で最も高級なワインです。16世紀に、高名なロマネというブドウ畠をコンティ公が手に入れたことから付けられたと言われています。年間平均生産量は6000から7000本、小売価格は200万円で、買い占めるには140億円が必要になります。アメリカのダウの平均とロマネ・コンティの市場価格の上昇率は非常に近しい曲線を描いており、それもそのはず、世界で最もワインを消費しているのは、アメリカやフランス、イタリア、ドイツ、中国といった経済大国です。日本は経済大国であるのにワイン消費国としては16位で、年間一人当たりの消費量3ℓとあまりワインを飲んでいないことが分かりますが、スパークリングワインを毎年約1700万本輸入しており、日本人は泡好きだということが分かります。赤ワインや白ワインの消費はやはり欧米が中心です。キリスト教徒とワインは非常に深い関わりがあり、教会の周りにブドウ畠を開き、作ったワインを販売して教会を維持するという歴史が長く続き、今でもキリスト教徒の多い国ではプロダクションが積極的に行われています。ところが現在ヨーロッパでは、ワインをあまり消費せずに経済先進国へ輸出し儲けようという流れになっています。

ワインの投資・プリムールの仕組み 私どもが取引しているボルドーのワイン商の倉庫には、何万ケースというワインが確保してあります。売らずに確保している理由は、値段が上がるのを待っているためです。世界で一番検索されている赤ワイン シャトー・ムートン・ロートシルトは、1853年にイギリスの大実業家であるロスチャイルド家が買収し、メドックの格付けの中で、二級から一級に格上げされたという前例のないサクセスを手に入れた唯一のシャトーです。1924年にジャン・カルリュがラベルをデザインし、1945年から今日に至るまで名だたるアーティストが無償でラ

ベルのデザインをしていることでも知られています。値段を見ると、2011年からの10年間で値段が緩やかに上がっていきます。先物取引での値段とファーストリリースの値段の差が17%から21%です。先物取引は、樽の段階で買い付けて金額の半分を支払い、瓶詰された時点でもう半分を支払います。その期間大体18ヶ月から22ヶ月の間にリターンが17%から21%値上がりしますから、こんなにいい投資はないと、世界中のお金持ちやワイン商が挙ってプリムールを買い続けています。

サスティナブルへの取り組み 最近非常に注目されているワイン産地のナバ・バレーは、アメリカ・カリフォルニア州サンフランシスコの北100マイルほどに位置し、アメリカのワイン産地の象徴とも言えるべき場所です。乾燥した地中海性気候でブドウ栽培に非常に向いていますが、ワイナリーができ観光地となってから、商業開発や宅地開発で土地の水が枯渇して水がなくなり、葉が擦れ合っただけで山火事になってしまい乾いた状態になってしまいました。ロバート・モンダヴィとロスチャイルド家が共同で作ったオーパス・ワンというワイナリーが中心にありますが、このままでは環境破壊でワインのイメージが悪くなってしまうということで、オーパス・ワンが取り組んでいるのがサスティナブルです。太陽発電と風力発電によって電力を使わないように、そしてブドウ畠への灌漑を節約できるようにブドウ栽培の効率化を進め、さらに使用するエネルギーを最小限に抑えようとナイトハーベスト 夜の収穫を行っています。ワインが商業から環境への取り組みというところの意識が世界中のワイナリーで拡がっています。

オーガニックワインとは 自然派ワイン、オーガニック栽培によるワインが、日本をはじめ世界中でも注目を浴びています。マルセル・ラピエールは、オーガニックワインの先駆者と言われており、ルドルフ・シュタイナーというバイオダイナミックスを提唱した超自然派農業をワイン作りに初めて採用した方です。オーガニック栽培のワインとは、無農薬、肥料を与えない、自然な状態でワインを作っているということです。ワインは84%がブドウが地中から吸い上げた地下水源の水で、ワインを飲むということは、その土地のミネラルウォーターを飲むことと同じ感覚です。そして糖分が酵母によって発酵したアルコールが10~13%、残りは有機酸（リンゴ酸・酒石酸など）やミネラルです。このようにナチュラルな水源から作られた有機酸を含むアルコール飲料は他にありません。しかしワインは長い距離を船で輸送するため、痛まないように酸化防止剤である遊離亜硫酸SO2が溶かされており、飲みすぎると頭痛を引き起こします。酸化防止剤添加量が少ない順に自然派ワイン、バイオダイナミックスワイン、オーガニックワイン、通常のワインとなりますので、今日本でオーガニックワインがブームになっている理由の一つでもあるかもしれません。また良いブドウで作られた高級ワインは酸化防止剤が無くても大丈夫ということと、遊離亜硫酸がワインの中で働く期間は三年ですので、ほどよく熟成されたワインを飲むことも、健康には重要だと言えると思います。

ワインの消費 なぜ今日本やアジア諸国でワインがたくさん売れているのかというと、アジア圏で食肉の消費量が増えているためです。スーパーではたくさんのステーキ肉が売られていて、それと同時に赤ワインも消費されています。欧洲の方はワインを飲まなくなったと先ほどお話しましたが、欧洲のアルコール消費量を年代別に見ると、やはり40代50代60代の方はワインを飲む比率が高く、一番体に優しいワインを飲みながら余暇をゆっくり過ごしたいという理由で消費が増えていることも事実です。

今日日本ではアルコールの消費が低迷しており、消費に消極的な時代を迎えています。まさに日本の禁酒法時代が訪れたと危機感を募らせていますが、ワインだけを見ると右肩上がりです。人口と同時にワインの消費量が増えているのは、女性がアルコールを消費はじめ、特にワインに偏っていることが窺えます。

これから21世紀のワイン消費の在り方をずっと考えておりまして2017年にザ・コンコルド・ワインクラブを設立いたしました。ワインを余暇として楽しんでいただき、ワインを通じて色々な方と知り合えるというワインクラブです。また、頭の痛くならないワインを気軽に購入できるシャンゼリゼ・ワインアベニューというサイトも始めました。日本の方々にワインの良さを知っていただき、普及するとによって日本の食生活やライフワークが豊かになってほしいという願いを込めて、これからも輸入販売を行っていこうと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

ニコニコBOX情報

安部 義彦さん

フェルドマン教授、ご多忙中の卓話ありがとうございます。楽しみにしておりました。

淺田 豊久さん

昨日マラソンで優勝した道下選手は福岡のロータリアン!!おめでとう!!

堀井 健一さん

フェルドマン様の卓話、楽しみにしております。

池田 泰義さん

本日の卓話、ロバート・フェルドマン様よろしくお願ひします。

今村 道子さん

マウラーさん、いつもあたたかい笑顔でいらっしゃいました。ご冥福をお祈り致します。

劔物 美紀子さん

マウラーさんありがとうございました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます

森 佳子さん

フェルドマンさん本日はお忙しい中卓話を有難うございます。マウラーさんの御冥福を心よりお祈り申し上げます

中川 勉さん

今日はいくぶん涼しいですね。

小笠 裕子さん

ロバート・フェルドマン様、本日の卓話を楽しみにまいりました。よろしくお願ひ申し上げます。

大橋 裕治さん

本日のロバートフェルドマン先生の卓話を楽しみにしておりました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

芹澤 ゆうさん

本日は、永く親しくしているロバートフェルドマンさん、卓話を楽しみにしております。

杉本 潤さん

フェルドマン様、本日の卓話、有難うございます。

高倉 太郎さん

フェルドマン様、本日の卓話よろしくお願ひいたします。

高柳 公康さん

9月ですね、だいぶ秋らしくなりましたね。

安井 悅子さん

ロバート・フェルドマン様、本日の卓話ありがとうございます。勉強させて頂きます。マウラーピーリードさん、いつも元気で楽しいソングリーダーをありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

9月6日 合計 45,000円 累計 305,000円

9月6日のお食事

東京六本木ロータリークラブ

Menu

Quinoa salad, lemon dressing
Salami, roasted beetroot
キヌアサラダ レモンドレッシング
サラミ ピーツのロースト

Roasted pork loin, mustard and cornichon sauce
Sautéed butternut and chestnut, parsley
ポークロインのロースト マスタードヒユルニッシュソース
バターナッツカッシュと栗のソテー パセリ

Grilled marinated pacific saury, soy sauce

Baked egg

Deep-fried minced shrimp dumpling
Grilled minced chicken dumpling teriyaki

Pickled myoga ginger

秋刀魚の漬け焼き

玉子焼

揚げ海老真丈

鶏つくね照り焼き

酢取り茗荷

Steamed glutinous Japanese rice with mushroom
糀のおこわ 国産米使用

Tart tatin
タルトタタン

2021年9月6日(月)
グランドハイアット東京



9月6日の例会出席率(暫定)

- 会員の例会出席数(出席率) 31名(65%)
- ゲスト・ビジターの参加者数 1名

※メーリングを含めていない暫定の人数です。

次回のプログラム

令和3年9月27日

卓話『今に伝わる「マリア観音」探訪』

聖心女子大学 学長 高祖 敏明様

場所:グランドハイアット東京